

新テストの外部検定 認定試験を発表！

英検は「1次で落ちない」新方式で、より利用しやすく！

旺文社 教育情報センター 2018年5月

大学入試センターは3月26日、「大学入試英語成績提供システム」の参加要件の確認結果について発表した。このシステムは、入試で利用する英語の検定の成績を大学入試センターが一元管理するもの。今回の発表は、そのシステムで対象となる検定、いわゆる認定試験だ※。入試改革の一環として2021年度入学者選抜から実装する。

本稿では認定試験について解説していく。またその中でも英検は、現状、受験生の入試利用が圧倒的に多いと見られ、注目度も高い。認定を受けた英検の新方式についても詳しく見ていこう。

※大学入試センターは、昨年11月に公表した本システムの参加要件から「認定」という表現を使っていないが、当資料では便宜上、「認定」とする(ほか、国大協「共通テストガイドライン」等でも「認定」)。

●本資料のサマリー

- ・認定を受けたのは、英検／TEAP／TEAP CBT／IELTS／TOEFL iBT／TOEIC L&R,S&W／GTEC／ケンブリッジ英語検定。
- ・英検は新方式3つが認定（S-Interview／1 day／英検 CBT）。
「従来型」とは実施方法が異なるだけ。級やスコア、問題構成などは変わらない。特に「S-Interview」はほぼ同じ。
- ・大学は本システムを利用しない場合、認定試験や「高3で2回までルール」に関わらず、自由に設定が可能。
- ・新CEFR対照表が発表。

1. 認定試験の顔ぶれ

申請は7団体24検定から出され、7団体22検定が認定。加えて1団体1検定が条件付きで認定。主だった検定は、基本的にすべて認定された。

●認定された外部検定 【 】は実施団体

- ・英検（1級～3級） 【公益財団法人 日本英語検定協会】 ※新方式での実施
- ・TEAP（TEAP／TEAP CBT） 【公益財団法人 日本英語検定協会】

- ・ IELTS (アカデミック・モジュール) 【ブリティッシュ・カウンシル】
- ・ TOEFL iBT 【Educational Testing Service】
- ・ TOEIC (L&R および S&W) 【一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会】
- ・ GTEC (Advanced/Basic/Core/CBT) 【株式会社ベネッセコーポレーション】
- ・ ケンブリッジ英語検定 (8種) 【ケンブリッジ大学英語検定機構】
- ・ IELTS (アカデミック・モジュール) 【IDP:IELTS Australia】 ※条件付き認定

IELTS は、ブリティッシュ・カウンシルと IDP:IELTS Australia の 2 団体から申請が出された。いずれも同じテストだが、前者は認定、後者は条件付き認定となった。後者は日本での実績期間が短いため、引き続き実施して要件の「2年以上」を満たすことを条件に認定された。

認定がなされなかったのは、ケンブリッジ大学英語検定機構のリングスキルと、英検の「従来型」という実施方法。リングスキルは国内での実施実績がないため、英検の「従来型」は、「1回の試験で4技能を測定」という要件を満たしていないと判断されたためだ。

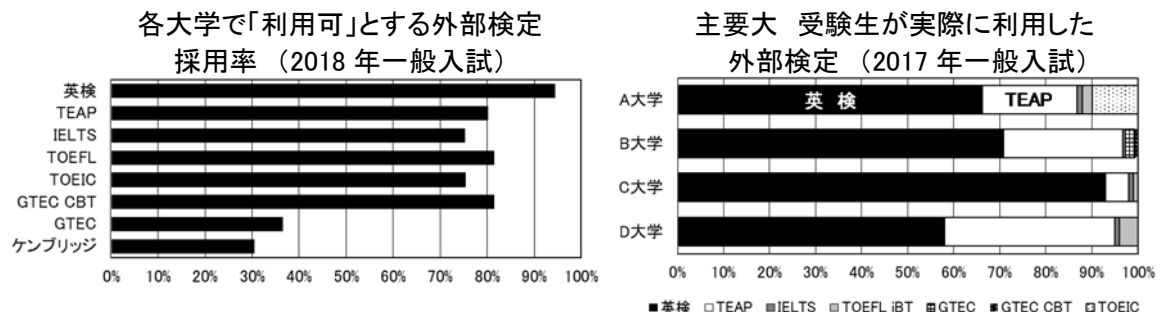
文科省によれば「1回」とは必ずしも「1日」を指すわけではない。しかし英検の「従来型」は、1次 (Reading、Listening、Writing) の合格者のみ 2次 (Speaking) を受検できる仕組みになっているため、「1回」とはみなされなかった。

ただしこれは実施方法の1つ。英検は1級～3級で新方式が認定を受けている。新方式については次項で見ていこう。

2. 英検の新方式

せっかく検定を受けても志望校で利用できなければ、入試の観点からはムダになってしまう。受験生が検定を選ぶ際に重要なポイントは、それを利用できる大学が多いことだ。

現在行われている外部検定利用入試では、英検は利用できる大学がもっとも多い。また、実際に受験生が利用した検定も、公表している一部の大学を見ると、英検が大半、あるいは英検と TEAP で 9 割という傾向が見られる。



【左グラフ注】

※各大学の検定を利用する入試(一般入試)の中で、それぞれの検定が「利用可」とされている割合。原則、学科単位で集計。

※そのほかグラフ詳細は、旺文社教育情報センターHP「入試情報」コーナー2017年12月7日記事参照。

●英検の新方式

認定試験の中でも注目はやはり英検になろう。そこで英検の新方式について見ていこう。

今回認定された英検の新方式は「S-Interview」「1 day」「英検 CBT」の3つ※。これらは実施方法を示す名称で、級やスコア、問題構成などは「従来型」と変わらない。生涯有効な資格としても同様だ。

※S-Interview = 正式名称「英検 2020 2 days S-Interview」。認定段階の仮称が「公開会場実施」だったもの。

※1 day = 正式名称「英検 2020 1 day S-CBT」。認定段階の仮称が「1日完結型」だったもの。

新方式				いわゆる通常の英検 (以下、これまでと変更なし)
方式名	S-Interview (英検2020 2 days S-Interview)	1 day (英検2020 1 day S-CBT)	英検CBT	従来型
利用可能な入試	「成績提供システム」を利用する入試 & 利用しない入試			「成績提供システム」を利用しない入試
実施方法	【1次;RLW】紙(PBT) 【2次; S】対面式 (従来型と同)	【RLW】紙(PBT) 【 S】録音式 (Sが録音。ほか従来型と同)	【RLW】コンピュータ(CBT) 【 S】録音式 (4技能すべてCBT)	【1次;RLW】紙(PBT) 【2次; S】対面式
日程	2日(1次と2次が別日程)。 ※2次は全員が受検可能。	1日ですべて行う。	1日ですべて行う。	2日。 ※2次は1次合格者のみ。
会場	本会場 約400会場 (離島、僻地等は準会場も)	全都道府県	大都市19会場 (今後拡大を検討)	本会場 約400会場 準会場 約17,000会場
年間実施回数 (4~12月)	2回	2回	毎月	3回 (1月以降の第3回含む)
対象学年	高3生・既卒生	高3生・既卒生	制限なし	制限なし
実施級	1級	○		○
	準1級	○	○	○
	2級	○	○	○
	準2級	○	○	○
	3級	○	○	○
試験スタート	2019年度	2019年度	2018年8月	

英検 HP より作成。今後変更もありうる。

※R=Reading、L=Listening、W=Writing、S=Speaking。 ※PBT=紙の試験、CBT=コンピュータの試験。

※対象学年にある「既卒生」の認定試験の利用は、現状未定。今後の文科省の決定による。

特に「S-Interview」は、「従来型」とほとんど同じだ。違いは全員が2次に進める点。1次で不合格になる心配がなく、4技能すべての評価を受けることができる。むしろ「従来型」よりも利用しやすいといえる。

「1 day」も、Speaking が録音式という点が違うのみ。「英検 CBT」はパソコンで受ける試験になるため、その操作になれていることが必要だ。

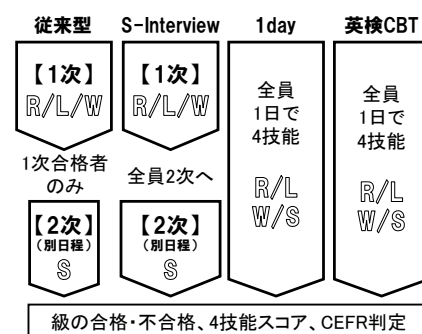
新方式の試験会場は、原則、英検協会が管理する本会場となる。団体申し込みをした高校などを会場とする準会場は、離島やへき地等を除いて予定されていない。検定料は今後決定する見込みだ。

検定料は今後決定する見込みだ。

●対策は？

録音式や CBT の機器の操作以外は、すべてこれまでどおりの英検対策でよい。例えば問題集も、方式によって異なるということはない。

英検 各方式の試験の流れ



●大学が「成績提供システム」を利用しない場合

大学入試センターによる本システムの具体的な制度設計はこれからになる。本システムは共通テストで検定利用をするために準備が進められているが、独自入試でも利用できるのか、推薦・AOは…、など、今後の決定を待つことになる。受験生個人にどうやって検定の成績、入試の成績を紐づけていくか、このことが利用できる入試の範囲に関連するだろう。

独自入試などで本システムが利用可となった場合も、実際に利用するか否かは大学判断となる。主に大学側のメリットは以下の点になるろう。

①成績回収

【利用する場合】 システムから成績提供を受けることができる。

【利用しない場合】 独自に志願者（または検定団体）から回収する。

②対象とする外部検定

【利用する場合】 認定試験に限定。

【利用しない場合】 自由に設定。受験者の多い英検の「従来型」も取り込むことが可能。

③外部検定の受験時期

【利用する場合】 高校3年生の4～12月の2回までの成績が利用可能。

【利用しない場合】 自由に設定。2年次に取得した成績なども可（大学判断）。

本システムの実装は現在の高校1年生が受験する2021年度入試から。それまでの外部検定利用入試は、認定試験や「高3で2回までルール」に関わらず、現状どおりに行われる。

3. 新 CEFR 対照表

CEFR	各 検 定 の ス コ ア											
	英 検			TEAP	TEAP CBT	IELTS	TOEFL iBT	TOEIC L&R/ TOEIC S&W	GTEC	ケンブリッジ英語検定		
(英検CSE)	各級のテストで CEFRの判定が可能な範囲								各テストで CEFRの判定が可能な範囲	各テストで CEFRの判定が可能な範囲		
C2						9.0 8.5					230 200	230 ↑ 210 ↑ Proficiency
C1	3299 2600	合格 2630→	3299 ↑ 1級 ↓ 2304	400 375	800	8.0 7.0	120 95	1990 1845	1400 1350	1400 ↑	199 180	190 ↑ Advanced ↓ 180 ↓ C1
B2	2599 2300		2599 ↑ 準1級 ↓ 2304	374 309	795 600	6.5 5.5	94 72	1840 1560	1349 1190	1280 ↑	179 160	170 ↑ First ↓ 160 ↓ C1
B1	2299 1950	合格 1980→	2299 ↑ 2級 ↓ 1728	308 225	595 420	5.0 4.0	71 42	1555 1150	1189 960	1080 ↑ CBT	159 140	150 ↑ Preliminary ↓ 140 ↓ B2
A2	1949 1700		1949 ↑ 準2級 ↓ 1728	224 135	415 235			1145 625	959 690	840 ↑ Basic ↓ 270	139 120	150 ↑ Key ↓ 120 ↓ B1
A1	1699 1400	合格 1456→	1699 ↑ 3級 ↓ 1400					620 320	689 270	270 ↑ Core ↓ 270	119 100	100 ↓ A2

文科省 2018 年 3 月公表。今後変更もありうる。

※各検定のスコアは4技能のもの。

※英検、GTEC、ケンブリッジ英語検定は、テストが細かく分かれている。各スコアはそれぞれのテストで CEFR の判定が可能な範囲。【例】英検準2級は1400～1949の範囲でCEFR A1かA2を判定。

※CBT、iBTは、4技能すべてをコンピュータで行うテスト(TEAP CBT、GTEC CBT、TOEFL iBT)。

※TOEICのスコアはS&W(話す、書く)のスコアを2.5倍にして、L&R(聞く、読む)と合計したもの。

●新 CEFR 対照表

認定試験とあわせ、CEFR 対照表の更新版が発表された。CEFR は外国語の運用能力を C2～A1 で示した国際的な評価基準。この表により、各検定でどの程度のスコアを取れば CEFR の何に相当するのかがわかる。検定間のスコアも横並びで比較できる。

現在は主に大学が出願資格、得点換算、加点など、入試でスコア設定をするのに利用されている。受験生が入試要項で CEFR を目にするのはほとんどなく、各検定の級やスコアが具体的に表記されている。しかし結局、それらのスコアも CEFR 対照表をもとに設定されている。受験生も今後は、自分のレベルを把握したり、目標設定をしたりするのに CEFR 対照表を参考にするとよいだろう※。

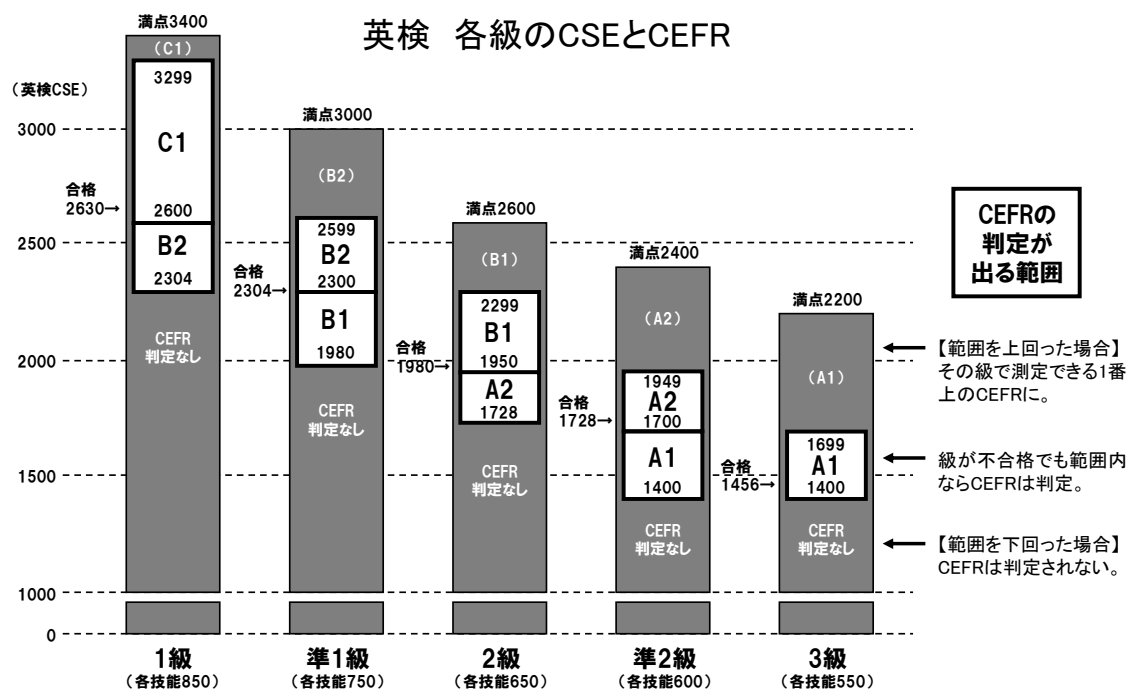
※「成績提供システム」では、大学入試センターが各大学に成績提供をする際、各検定の通常の成績と合わせて、CEFR の判定も提供することになっている。今後は CEFR でレベル指定をする大学が増える可能性もある。

●レベルの目安

文科省が目標としている高校卒業段階の英語力は A2～B1。大学側が入試で指定してくるレベルは、A2～B2 の 3 段階に集中している。英検でいえば準 2 級、2 級、準 1 級を持っていると大学入試で利用できると考えてよい。A1（同 3 級）では利用できる大学が非常に少ない。逆に C1（同 1 級）まで求めてくる大学はほとんどない。

●英検の仕組み

ここで英検について詳しく見てみよう。下のグラフは、先の CEFR 対照表について、各級テストの満点等を加えて組み替えたものだ。



英検 HP をもとに作成。

英検は「英検 CSE」というスコアで成績を出し、これにより「級の合格・不合格」と「CEFR」が判定される（現在の英検の成績表には CEFR は表示されていない。今後予定）。

【例】2 級を受けて CSE が 2000 だった ⇒ 2 級合格、CEFR B1。 ※例外の場合もある。

各級には CEFR の判定が出る CSE の範囲がある。実力に対して難しすぎたり、簡単すぎたりする級を受けない限り、範囲外になることは少ないだろう。前述のとおり、現在の入試では CEFR を求める大学はほとんどない。しかしそれでも英検は「級合格をめざす ⇒ 実力にあった級を受検する ⇒ CEFR の判定を得る」のが基本だ。

なお、CSE は 0 から満点まで成績表示される。CSE が取得できないということはない。

●「級合格」「CSE」「CEFR」、結局どれをめざす？

結局、大事なものは何か。これはやはり級合格だ。現状の外部検定利用入試では、「出願資格」でも「得点換算」でも「加点」でも、検定の成績は以下の形で求められる。もっとも多いのは(1)。級合格がなくては、利用できる大学が限られる。(2)(3)も増えている。

(1) 「級合格」を求める大学 … 【例】出願資格; 準 2 級以上

⇒ 現状はこの大学が大半。

(2) 「級合格」& 「CSE」を求める大学 … 【例】出願資格; 準 2 級合格かつ CSE1800 以上

⇒ 合格ラインよりも少し高めに CSE を設定（準 2 級の合格は 1728）。

(3) 「CSE」を求める大学 … 【例】出願資格; CSE1800 以上

⇒ 級は問わず、不合格でも CSE をクリアしていれば OK。

(4) 「CEFR」を求める大学 … 【例】出願資格; CEFR A2 以上

⇒ 級は問わず、不合格でも CEFR をクリアしていれば OK。現状はほとんどない。

高校生は、「志望校で必要なレベルを確認する」⇒ そのレベルに対して「級合格をめざして受検する」、という流れで目標設定をしていくのがいいだろう。

●高 1・2 を含めた英検の受検計画

【高 2 まで】「従来型」で自分のレベルを把握 & 4 技能テストに慣れておく。

【高 3】「S-Interview」などの新方式を受検。

成績提供システムを利用する入試では、どのみち 2 年次までの成績は使えない。ただし練習と割り切ってしまうより、システムを利用しない入試であれば、2 年次の従来型でも使える可能性が高い。現状どおり従来型を採用する大学が多いと予想されるからだ。

入試改革の実装以降、外部検定利用入試は、成績提供システムを利用する入試と、利用しない入試の 2 種類が存在することになる。前者は「認定試験」と「高 3 で 2 回までルール」の制限があり、後者はいづれもない。3 年次では認定試験を中心に受検をしていくことになるが、1・2 年次も含めた受検計画を組み立てていくことが有効だ。